

第 40 回目 新しい人を身に着る (12)

●今回は「新しい人を着る」というシリーズの第 12 回目で、「賢い者のように歩む」というシリーズのパート IV となります。「互いに従う」ということについて考えます。「賢い者のように歩む」というその勧めとして、

(1) チャンスを十分に生かすこと

(2) 聖霊に満たされること

① 聖なるホモ・ルーデンス(神の遊び人)となること一神の大庭でもっと自由に遊んでもいいのだーという
思いの改革。

②詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り(教え分かち)、主に向かって賛美し、いつでも、どこでも、
すべてのことについて神に感謝すること。

そして今回は、(3) 互いに従うことです。(=互いに仕え合うこと)

●今回のテキストを開きましょう。エペソ人への手紙 5 章 21 節です。

【新改訳改訂第 3 版】 キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。

1. 「互いに従う」とは・・・

●テキスト後半の「互いに従いなさい」ということばは、一見、矛盾したような表現だと思いませんか。「従う」ということばは、上下関係をはっきりさせるような、ある意味で厳しい言葉です。それが「互いに」という言葉がつくことによって、その厳しい上下関係を反古(ほど)にしてしまう感じになるからです。

●続く 22 節以降では、「従う」ということばがキーワードとなっています。

5:22 妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

6:1 子どもたちよ。主にあつて両親に従いなさい。

6:5 奴隷たちよ。あなたがたは、キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。

妻が夫に対して、子が親に対して、奴隷が主人に対して取るべき態度は、みな「従いなさい」とあります。

それに対して、夫が妻に対して取るべき態度は愛すること、親が子に対して取るべき態度は育てること、主人が奴隷に対して取るべき態度はおどすことをしないこと・・・とパウロは教えています。

●にもかわかわらず、「互いに従いなさい」ということばが意味することは何なのでしょう。か。「互いに」とは、

(1)教会における神の家族・・・信徒同士、牧師、教会スタッフという役職を持っている者も、もっていない者も。

(2)キリスト者の家庭における ① 夫と妻 ② 親と子 ③ 主人と奴隷・・・の関係を意味します。

אגרת שאול אל האפסים

●5章21節の様々な訳を見てみましょう。

(新共同訳) キリストに対する畏れをもって、互いに、仕え合いなさい。

(柳生訳) キリストを畏れ敬う気持ちから、互いに、ゆずり合いなさい。

(尾山訳) キリストに対する恐れをもって、互いに、相手を立てなさい。

◆「従う」という、本来、厳しい上下関係を表すことばが、面白いことに、**互いに「仕え合う」「ゆずり合う」「相手を立てる」というふう**に訳されています。聖書はどれも完璧な訳というのではありません。いろいろな聖書を読み合わせることによってイメージが変わってきます。「従いなさい」と訳された新改訳の聖書だけを読むと、上の言うことに対して下にいる者は絶対に従わなければならないというイメージで受け取ります。事実、そのように教えている牧師もいるかもしれません。しかし同じことばが、「仕え合いなさい」「ゆずり合いなさい」「相手を立てなさい」と訳された聖書を読むことで、牧師に従えという解釈はできなくなります。

●ここにこの世の常識とは異なる主従関係、つまり、「互いに従う」という表現が意味する新しい関係 —仕え合う、ゆずり合う、相手を立てるという関係—が、キリストを畏れ敬うという視点から命じられているのです。ここが重要なポイントです。「ゆずり合う」「相手を立てる」ということばを「敬う」ということばでまとめると、キリスト者同士の関係を右図のように、三つのキーワードで表わすことができます。



●とはいえ、今日、自分の身を守ることに精一杯な社会では、「仕える」という生き方は必ずしも歓迎されるものではありません。少しでも自分が得をして、いいところ取りをして、楽することばかり考えてしまうことが多いのではないかと思います。神と人々に仕えることを喜びとし、しかも、自らそれを自分のライフスタイルとする生き方は今日歓迎されなくとも、この「仕える」という生き方は今日の教会に求められているのではないのでしょうか。なぜなら、それがキリストのライフスタイルだったからです。神の子どもとされた私たちはキリストのように生きることが求められているのです。

2. イエシュアのおしえと行為に倣う

●イエシュアの生涯とその働きをみるならば、「仕える」ということがどういうことかを知ることができます。

「(婚礼から) 帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。」(ルカ 12:37)

●婚礼から突然帰って来た主人を、目をさまして迎えたしもべたちは幸いです。なぜなら、主人のほうで帯を締めて進み寄って給仕をしてくれるからです。本来ならば、あり得ないことです。主従関係が逆転しています。主人自ら自分のしもべの給仕人となり、自分のしもべに自分自身をささげ尽くすという立場の大逆転が起こっているのです。

אגרת שאול אל האפסים

●普通、給仕される者(接待される者)は、給仕する者(接待する者)よりも上の立場にあるということがこの世の常識です。ところがイエシュアという方は、その常識を真っ向からくつがえして、神の国における本当の偉大さという基準が「給仕すること」にあるということを主張されたのです。

●ルカは主人がしもべのために「**食卓の給仕をする**」という言い方をしていますが、ヨハネの福音書では、おもしろいことに「**足を洗う**」という言い方をしています。

【新改訳】ヨハネの福音書 13章 12~17節

イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。 それを行なうときに、あなたがたは祝福されるのです。」

●ルカは「食卓で給仕する者のように」ということばで仕えるという模範を示しましたが、ヨハネは「足を洗うしもべのように」ということばで仕えるという模範を示しました。「人の足を洗う」という行為は、当時、奴隷がする仕事でした。イエシュアはその奴隷がすることを自分がすることによって、「仕える」ということがどういふことかを教えようとしたのです。

●「食卓で給仕する者のように」「足を洗うしもべのように」とは、しもべの心をもって、互いに、仕え合うことを意味します。このことを、イエシュアはとても重要視されました。そこでこう言われたのです。

あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。 人の子(イエシュア自身のこと)が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、 自分のいのちを与えるためなのです。(マルコ 10:43, 45)

●イエシュアの生涯は、神に仕え、そして人に仕えるという、まさに「仕える生涯」でした。人間の生涯はだれでも結局のところ、一つの文章(ワンセンテンス)で言い表すことができます。つまり、

「誰が」 「だれのために」 「何を」 「どうしたか」

●「私は」「だれのために」「なにを」「どうするのか(どうすべきなのか)」という問いを持ちつつ生きなければなりません。それが「賢い者のように生きる」ということなのです。イエシュアの生涯を表すワンセンテンスはこうです。「イエシュアは、あなたのために、ご自身のいのちを 与えた(捨てられた)。」。しかもそれは、強いられてそうしたのではなく、自ら進んで、そうされたのです。ここに愛があります。「互いに、仕える者となること」、これがイエシュアの模範であり、パウロが「互いに従いなさい」といったメッセージなのです。そこに、神から来る「仕える喜び」があります。イエシュアはこの喜びをもっていたのです。

●ヨッパにいた「女の弟子」ータビタ

אגרת שאול אל האפסים

【新改訳改訂第3版】使徒の働き 9章 36～42節

36 ヨッパにタビタ(ギリシャ語に訳せば、ドルカス)という女の弟子がいた。この女は、多くの良いわざと施しをしていた。

37 ところが、そのころ彼女は病気になるまで死に、人々はその遺体を洗って、屋上の間に置いた。

38 ルダはヨッパに近かったので、弟子たちは、ペテロがそこにいると聞いて、人をふたり彼のところへ送って、「すぐに来ててください」と頼んだ。

39 そこでペテロは立って、いっしょに出かけた。ペテロが到着すると、彼らは屋上の間に案内した。

やもめたちはみな泣きながら、彼のそばに来て、ドルカスがいっしょにいたころ作ってくれた下着や上着の数々を見せるのであった。

40 ペテロはみなを外に出し、ひざまずいて祈った。そしてその遺体のほうを向いて、「タビタ。起きなさい」と言った。

すると彼女は目をあけ、ペテロを見て起き上がった。

41 そこで、ペテロは手を貸して彼女を立たせた。そして聖徒たちとやもめたちを呼んで、生きている彼女を見せた。

42 このことがヨッパ中に知れ渡り、多くの人々が主を信じた。

●36 節に「ヨッパにタビタ(ギリシャ語に訳せば、ドルカス)という女の弟子がいた。」とあります。タビタだけで良いのに、わざわざギリシャ語に訳せば「ドルカス」と記していることに隠された意味があります。なぜなら、「ドルカス」は「かもしか」という意味であり、聖書で「かもしか」といえば、牛や羊ややぎと同様に神に受け入れられる動物です。なぜなら、「反芻し」「ひづめが分かれている」からです。しかも、姿は華奢でその目はとても美しいのです。このドルカスという女性は「かもしか」にふさわしく、全焼のいけにえとして自分のすべてを神にささげ、人のために施しをしていたのです。その女性が死んだというので、この女性の恩恵に与った多くのやもめたちが悲しみ、ルダにペテロが来ているということで、ヨッパの弟子たちが彼を呼びにやっただけです。その結果、ドルカスはよみがえったという話です。ドルカスはイエシュアの「仕える」という生き方を彼女なりに示した女性でした。彼女がした「施し」は無償の奉仕だったのです。

●このドルカスのように「仕える喜び」をもって生きることを、私たちは聖霊によって促されているでしょうか、この「仕える喜び」の精神が教会において、あるいはキリスト者の家庭において培われていけば、おのずと、その精神は社会に対しても反映されていくと信じます。キリスト教の歴史において、学校や、医療や、福祉の働きのすべてが、教会(修道院)から社会の諸問題に対する働きとして起こってきました。今日の自由意思を尊重するボランティア精神のルーツはもともと教会にあったものです。



●「互いに従いなさい」とのことばは、言い換えるならば、キリストの仕える喜びをもって、人に仕えよ、というメッセージなのです。これが神の国における神と人に仕えるライフスタイルだと言っているのです。この世におけるさまざまな領域—医療関係、行政関係、福祉関係、教育関係、治安関係、サービス関係等—において、神の子どもたちがそれぞれ「仕える精神」をもって遣わされることが大切です。そうした人材が育つには時間がかかりますが、私たちはこれからも祈っていく必要がありますし、他人事ではなく、私たちがそれぞれ自分のこととして「仕える喜び」をもって生きることのすばらしさを体験する必要があります。「仕える喜び」—なんとすばらしい人生でしょうか。そんな人生を主によって歩ませていただきたいと思えます。